

審 議 会 会 議 録 要 旨

会 議 名 称	第 7 回伊那市総合計画審議会
日 時	平成 30 年 10 月 2 日(火) 午後 1 時 30 分 から 3 時 35 分 まで
場 所	伊那市役所 501・502 会議室
出 席 者	委員 20 名(欠席者 8 名) 農林部長、商工観光部長、教育次長 事務局

○協議事項

- (1)前期基本計画第 4 章について(確認)
- (2)前期基本計画第 5 章について(協議)
- (3)前期基本計画第 6 章について(説明)

○主な意見・質疑

(1) 前期基本計画第 3 章について (確認)

(委員)

意見整理表の整理番号 65 について、観光事業の推進主体は、観光協会の外にも伊那市観光株式会社、振興公社、JA、商工会議所、商工会、企業、個人、ボランティアなどがある。修正案の内容に留めてしまうことは、もったいないと感じる。観光に関わる人達、また、お客様からも伊那市の観光体制は非常に分かり難いという声がたくさん寄せられている。観光協会の役割を明確にするだけでは不十分であるので、「観光推進主体の役割を明確にし、効果的な事業推進体制の構築を目指します。」と修文することを提案する。

(観光部長)

官民連携によるお客様の受け入れ、おもてなしの体制については、あらゆる団体が連携して体制を構築していく必要があり、ご指摘のとおりである。意見を踏まえた修正をさせていただく。

(2) 前期基本計画第 5 章について (協議)

第 5 章－第 1 節－第 1 項 学校教育

(委員)

施策と展開方針「1 学校教育の充実」のなかで、「情報機器の正しい利用のための情報モラル教育を進めます」とあるが、今の子どもたちは、パソコン、スマホ、ゲームに夢中になっており、友達と遊ばなくなっている。人と接することがないので、心の痛みや体の痛みを理解できなくなっている。それが間接的にいじめにつながっているとある本で読んだことがある。心の痛みや体の痛みを理解させる教育が必要であり、そうした記載をお願いしたい。

もう一点は、伊那市では、花育や木育など良い取り組みがある。子供たちが学校にある花や木を大切にしている活動は必要であり、豊かな心を育むことにつながると思うので、そうした記述も追加されたい。

それから、「4 学校施設の耐震化・長寿命化と適正配置」で最初のセンテンスに「快適性」という言葉があるが、夏場の暑さが問題になっており、今年の夏は特に暑く、午後になると子どもたちもぐったりしてしまって、授業を続けられる状況ではなかったと聞いている。県でも予算化して冷房設備の設置を進めていくようであるので、そのあたりもきちんと記載するべきであると思う。

(教育次長)

1点目の心の痛みが分かる教育については、後ほど出てくる第3項の「心の教育」にも関係してくるため、その内容を含め、記載について検討させていただく。2点目についても記載を検討させていただく。また、今年の夏は非常に暑く、クーラーの設置等についても議論されているところである。表現については検討させていただきたい。

(委員)

質問と意見であるが、P89 に「信州型コミュニティ・スクール創造事業」とあるが、概要を教えてくださいとかが1点と、また、この言葉が何か所か出てきて、「取り組みます」、「推進します」と書かれているので、KPIとして何か設定することはできないのか検討いただきたい。

(教育次長)

信州型コミュニティ・スクールとは、学校を地域全体で応援するような、学校と地域の関わりを教育の中に生かしていくということを目的としている。国がコミュニティ・スクールという考え方を示したところであるが、長野県では、学校の評価などに特化されないような独自の考え方により、「信州型」としている。伊那市では放課後の時間を利用して、地域の方に学習の支援をしていただいている。また、少し違うかもしれないが「暮らしの中の食」ということで、農業の関係についても、地域の方の力を借りて教育に取り入れている。そのような取組を行う事業ということでご理解いただきたい。KPIについては、検討させていただく。

(委員)

P90 の「5 学校・家庭・地域の連携強化」であるが、学校は、地域と一番密着した公共性の高いものであると認識している。地域との連携強化について、原案の記載は、こども安全見守り隊に特化した記載にとどまっている。キャリアフェスなどもそうであるが、地元の産業、地元の人材を知る中で、地元へ愛着を持って、いずれは伊那市に戻ってくるということを推進している中で、この内容では弱いと感じる。また、P96 に「よりよい教育環境推進連絡会」が出てくるが、地域の方にも参画していただき、教育を推進していくべきである。P90 の地域の連携強化の部分にも、「よりよい教育環境推進連絡会」の記載を明記していただき、積極的に学校教育に関わっていただくという姿勢を表現するなど、記載内容の充実を検討されたい。

(教育次長)

ご指摘のキャリアフェスの関係、先ほど申し上げた食育の関係など、様々なところで地域との関係を築き、発展させていくという方向で、意見を参考に修正させていただく。

(委員)

自分のフィールドから見た意見であり、場合によっては深入りしすぎたり、シビアだと感じられるかもしれないが、ご容赦いただきたい。伊那市へ戻り、1年半ほど地域の小学校の評議員など

をさせていただき、伊那市の現場を見てきたわけであるが、地域と密着したすばらしい教育が行われている一方で、現場の先生方も大変だろうというのが率直な感想である。私は、中高・短大、大学、大学院の私立の教育現場にいたので、私立の立場から申し上げますと、原案のような施策と展開方針をその学校の理念・教育ビジョンとして生徒の募集を行うとすれば、大変申し訳ない言い方であるが、間違いなく見向きもされない内容であると感じている。全てにおいて総花的で、人を育てるということにロマンを感じられない。

具体例として、教育の根幹である「1 学校教育の充実」の部分であるが、自分なりに文章を解釈すると、「学力の伸長のため、総合的な学習の推進と伊那市ならではの体験型学習により、生徒の意欲を高め、学力向上を図る」と読み取れる。それが初等教育、中等教育の方針ということでよろしいかお聞きしたい。また、P91 の最後のセンテンスは、大変重要な内容であると思う。私自身も教師をしていたので、昨今の教職員の長時間勤務の問題は非常に重く捉えている。このセンテンスは、「推進するとともに、」として2つの異なる内容を1つの文章につなげてしまっていることが、この文章を弱らせているのではないかと思う。それぞれを独立させ、別の項目として記載すべきである。地域に開かれた教育と働き方改革のことは、まったく関係のない内容であり、主語と述語が一致していない印象を受けたところである。

それから、P91 の KPI であるが、私から言わせると陳腐である。5年間でわかるという児童・生徒の割合をわずか数パーセント増やして、それが社会的にどういう教育を推し進めている評価といえるのか。同様に、P95 の KPI も不登校児童・生徒を減らすとあるが、これは、人間教育をする教育社会において、不登校児童に対する差別を感じさせる項目である。

併せて、原案には、教員の研修に関する項目がほとんど記載されていない。初回の審議会でも申し上げたが、例えば、伊那市に赴任すると教員として成長できるとか、勉強できるとか、そういったプライドを持てるような学校教育を推進していただきたい。具体策として、例えば保育士を含め、小中の教員の県外での研修を実施するなど、現場の教職員の就業意識を増長させる取組を推進していただきたい。

(教育次長)

P89 の「1 学校教育の充実」の部分について、伊那市では総合的な学習の推進であったり、「暮らしの中の食」という取組の中で、子どもたちの生きる力をつけるということを中心とした教育を行ってきている。委員の指摘は、こういったことで学力が上がるのかという趣旨であるかと思う。学力向上に向けた授業の改善等にも取り組んでいるので、そうした内容も含めた表現となるよう検討させていただく。P91 の最後のセンテンスであるが、ご指摘のとおり、異質な内容がつながり合われている文章だと私個人も感じた。それぞれ分けて別項目とする修正を検討したい。KPI についても、指摘をいただいたので、適切な KPI にするよう検討したい。同様に教職員の研修の関係も表現について検討する。

(委員)

先ほどの意見と同様に、KPI の見直し、教育力の向上について別項目とすることを願いたい。また、情報教育については記載があるが、英語の必修化ということもあり、「グローバル」というキーワードがどこにも出てこないのので、追記を検討されたい。

(教育次長)

必要な項目であると思うので、追記する修正を検討したい。

(委員)

高校再編に関連することであるが、長野県の教育委員会は「探究的な学び」をキャッチフレーズにしているが、再編で高校数が減少すると、探究的な学びをしたくても子どもたちの行き場が狭くなってしまうのではないかと感じている。現在もそうであるが、様々な学びを求め、子どもたちが伊那谷から、諏訪、松本へ流出している。また、長野、松本などは私学が充実しているが、極端なことを言えば、これまで伊那市は伊那西高校に対して支援をしてくれなかったのではないかと思う。伊那西高校は、自らの努力で学校を向上させている。私の地区にも敬老会などに来ていただいて見事な歌や劇を見せていただき、すばらしい教育が実践されていると感じたところである。

(教育次長)

私学に対する援助が十分かどうかということは、いろいろな意見があるかと思うが、私学援助は現在も行っているところである。敬老会での発表や、市の行事等にも参加いただけるよう声かけを行っている。

(会長)

私も西春近なので、参考までに。伊那西高校に対しては、伊那市から毎年100万円の補助を長年いただいている。また、大型バスが入れるように道路改良もしていただいた。生徒も元気いっぱい活躍しており、みんなで伊那西高校を育てていこうという雰囲気は当地にあるので、ご承知願いたい。

第5章－第1節－第2項 教育連携

(委員)

先ほどグローバル化という意見も出たが、私も小中学校世代の異文化交流、体験学習の意義というものが非常に大きいと思っている。民間では、ホームステイなど、子どもたちが海外で生活するプログラムがあり、観光協会でも民泊で海外の学校の子どもたちを積極的に受け入れ、学校同士の交流も盛んに行われているが、そうしたことを通じて、子どもたちの語学に対する意欲の向上や意識の動機づけなどにつながることを期待している。そうした内容の記述についても検討されたい。

(教育次長)

グローバル化がますます叫ばれる時代になってきている。大切なことであると思うので、そうした内容を追記する修正をさせていただく。

(委員)

まず質問として、第1項の学校教育と第2項の教育連携の項が分かれているのは、小中学校は伊那市立で、高校・大学は市立ではないので、その教育機関との連携という整理でよろしいか。

(教育次長)

義務教育の部分は、市の主務ということで、第1項で触れている。第2項は、義務教育と高等

教育との連携という整理である。

(委員)

小・中学校ではキャリア教育が盛んで、私も何度か参加させていただいたが、地域で元気に働く大人の姿を見て、地域に残ってもらおうという趣旨で開催されているものであると思う。しかし、高校へ行くとその時のことを忘れてしまって、都会に行きたいとか田舎はいやだとか、一番感じる時期である。高校や大学への進学で伊那を離れる時期に改めてキャリア教育をして、いずれ戻って来たいというモチベーションを持たせるような機会を積極的につくるということで、高校・大学と連携していくことがUターン施策としては重要ではないかと思う。

(教育次長)

意見の内容については、上伊那広域連合で取組があり、対象としては高校生、大学生も含まれている。市としても積極的に関係できるか検討させていただく。

(委員)

子どもを育てるということは、一つは生きる力を育む義務教育の部分と、もう一つは、地域で働くという視点が重要ではないかと思う。ここでは、教育連携ということで、学習面を強く打ち出されているが、どちらかといえば、地域に残して働いてもらうというか、次世代を支えるという意味があるので、教育連携というよりは、「高等教育と社会連携」というか、高校・大学というのは、本当に一部に過ぎないものであって、本来は、もっと社会につながっていく視点が必要であると思う。第2項としては、「教育連携」というくくりではなく、もう少し広い意味で子供を育てる、義務教育が終わった後、子どもたちを社会に出させる施策という位置づけで検討されたい。

(教育次長)

これまで、高校生、大学生に向けた教育委員会事業として、例えば高遠高校への支援など部分的に行ってきたが、特に取り組んでいないということが現状である。項目として、取り上げられるかも含め、検討させていただきたい。

(委員)

もし、この項目では難しいようであれば、義務教育の延長線上のところで触れていただくか、また、行政として取り組む項目があれば、加えていただきたいと思います。

(委員)

今、高遠高校について話が出たが、文面を見ると高遠高校だけが具体的に取り上げられており、バランスに欠くというか、高遠高校だけ特別なのかという印象を受ける。総合計画は、市として予算がついている個別具体的な施策に取り組みますということだけではないと思うので、全体を捉えた視点での書きぶりに改めたほうがよいと感じる。

(企画部長)

計画を統括する立場で私から回答させていただく。先ほどの意見も含め、私も同感である。非常に狭い概念でフレームが成り立ってしまっている。先ほども「社会連携」ということで提案をいただいたが、それぞれの部局が中心となって所管分野の原案を作成したため、このようになってしまっているが、当然縦割りではなく、全庁横断的に施策を考えていかなければならない施策

分野であると思うので、単なる学習面ではなく、U ターンであったり、働く場であったり、そういったアプローチも、現に市長部局では、商工観光部を中心にそういった取組も行っているのですが、全庁で連携してもう一度見直しをさせていただきたい。広域で取り組んでいる事業が多いわけであるが、ここは連携を重視している部分であるため、事業主体は広域連合であっても、市として全く絡まないわけではないので、そういう意味でも内容については再検討させていただきたい。

(委員)

学生時代に高遠焼についてのレポートを作成したことがある。当時高遠では、高遠焼を復活させようということで、町の事業としても動いており、そこに生きた素材があった。大学などの高等教育の研究場所として伊那市を売り出してはどうかという提案である。農業に関しても様々な研究素材があると思われるし、インターンという視点から考えても、伊那市内には様々な企業があり、若いころにそういった経験を重ねることで、ぜひ伊那市で働きたいという動機づけにつながるのではないかと思う。学者もこの地で論文を書けば、ここをふるさとと考えるし、学生もここに愛着を持つということで、「教育連携」と結びつくかどうか分からないが、高等教育の分野において、伊那市は様々な素材やフィールドを提供し、サポートしますという取組ができればよいと感じたところであるので、検討されたい。

(教育次長)

実際に伊那市のフィールドを使っただけの学習や研究をしていただいている例もある。市の事業ではないが、駅前の造り酒屋に東京農大に来ていただいたこともある。先ほど企画部長からも申し上げたが、この項を見直す中で、どこかに表現できればと考えている。

(委員)

先ほど出た高遠高校だけに限定しないほうがよいという意見に関連して、大学との連携についても、ここに書かれた3つの大学、信州大学、東京藝術大学、南信工科短期大学も同様である。おそらく高遠高校との連携があることに起因した書きぶりであると思うが、連携を広めるのであれば、さらに数を増やしていく必要もあるのではないかと思う。せめて「等」を入れるなど、限定するような書きぶりにしないほうがよい。

(教育次長)

大学との連携というなかで、現在関係のある大学を例示させていただいた記述である。施策として広げていくということであれば、意見のとおりであると思うので、検討させていただく。

第5章－第1節－第3項 心の教育

(委員)

質問と問題提起である。P94に「不登校の解消に努めます。」という表現があるが、この表現でよいのかということが疑問である。自分は不登校の子たちの居場所のボランティアのようなことを行っている中で、その子たちが抱えている悩みは、まわりから学校に「行かねばならない」というプレッシャーを浴びていることが一番である。先生は家に来て、何とか学校に連れて行こうとする、だけど学校に行けない、学校に行けない自分を自ら責める、という連鎖が生まれている。安

心する場所があって、自分から学校に行くということを育もうとしている途中で、そういう対応をされ、つらい思いをしている子を大勢見てきた。学校にどうしても行かなければいけないのか、例えばフリースクールのような第2の学校という環境をつくり、そちらで学ぶ場をつくるほうがよいのではないかと感じているところである。私個人の意見としては、第2の学校があれば、よい社会になると考えている。「不登校の解消に努めます。」ということが、方針になってしまってもよいのかという問題提起である。

(教育次長)

いろいろなケースを抱えている場合もあり、一概に解消することがよいとは言えない部分もあるため、記述について検討させていただく。

第5章－第1節－第4項 青少年健全育成・家庭教育

(委員)

質問であるが、KPI が私どもには理解しがたいというか、どうしてこのようなことを指標にするのかと疑問に思うところである。例えば、学童クラブの登録者数を582人から730人に増やす目標であるが、これは、学童クラブを充実させ拡大すると解釈すればよいのか、あるいは、家庭教育が充実を目指すことによって、家庭に子どもが帰っていけること(数を減らすことを)を目標とするのか、どのように解釈すればよろしいか。

(教育次長)

現在学童クラブの利用者は、年々増加しているのが現状である。いろいろな社会的要因があると思うが、そういった現状に対応できる、受け入れ態勢を整えるという視点での設定である。家庭教育の充実ということもあると思うが、現実には即した目標ということでご理解いただきたい。

(委員)

今の話では、「登録者数」という表現は、増やさなければならぬということになると思うので、「受け皿」の確保ということであれば、「定員数」とか「定員枠」という表現のほうが適していると思う。

(教育次長)

参考にさせていただく。

(委員)

関連して、何人かの委員から KPI についての意見があったので、私の意見を申し上げる。私は、長年教育現場にいた人間であるが、学校教育について、目標を数値化することがふさわしいかということは、極めて疑問である。競争意識を育むということは、ある種、重要ではあるが、こういった市の計画の中で、教育分野における指標の数値を入れる必要があるかどうかということは、ぜひ検討いただきたい。もし、このセクションは数値化した目標はいらないという結論であれば、より教育に専念できる現場になるのではないかと考えるがいかがか。

(教育次長)

総合計画を策定する中で、政策の目標ができた時にそれを検証する指標が必要だということ
で設定したものである。意見を参考にしながら、適切な KPI の設定ができるかどうかも含め検討
させていただきたい。

(企画部長)

全体の立場で補足させていただく。KPIは必ず各章に設定しなければならないというものでは
ない。委員ご指摘のとおり、特に教育分野は数値化できないものがあると思う。なじむもの、なじ
まないものがあり、特にハード整備のようなものは、目標を立てるべきであるが、逆に心にアプロ
ーチするような、例えば「意識の醸成」などは、数値化することはできないと考える。中身によっ
ては、数値化できない部分もあると思うので、その点は再度検討させていただく。

(委員)

青少年の健全育成のためのボランティアスタッフの充実・強化ということが課題としてあげられ
ているが、報道などで、LINE を使った子どもたちからの相談にスタッフ不足で応じきれなかった
という話題が報じられていた。これは一つの手段であるが、相談に対するハードルを下げること
は、相談体制の多様性という意味では非常に興味深いと思っている。結局は、相談体制を維持
するためのスタッフの体制をどう整えるかにつながると思うが、市町村単位で、相談体制の充
実・強化に取り組むことはいかがか。

(教育次長)

相談の体制を整えることは大変重要なことであると思う。表現というか、どの項に記載するかを
含め、検討させていただく。

(委員)

子ども食堂のことについて話をしたい。高齢者クラブの事務局をしているが、余っている食料
を集めてほしいと社協からの要請があった。社協では、夏休みや春休みなどに事情があって食
事がとれない子どもたちに食事を提供している。そうしたところ、子どもたちから感謝の手紙が届
いた。食事がおいしかったという感想の外に、新しい仲間や友達ができたと感想があった。
市のほうでも、健全育成という観点からもっと関与して、支援をお願いしたいと考える。

(教育次長)

社会福祉協議会で子ども食堂の運営をしているところである。施策の整理としては、福祉分
野になろうかと思うが、教育委員会でも対象児童の把握などで協力していかなければならない
部分もある。どういった形がよいかを含め検討させていただく。

第5章－第2節－第1項 生涯学習

(委員)

公民館についてお尋ねする。公民館には「分館」があるが、その位置づけや役割について、
現状を教えていただきたい。

(教育次長)

市内に9つの公民館があり、それぞれの地域に分館ということで、各区の中に分館を指定させていただいている。分館ではそれぞれの計画に基づき、事業を行っていただいております、年に数回、全体の会議を開催している。地域によっては、公民館の本館が深く関わっているところもあるが、伊那公民館などでは、それぞれの分館毎に事業を実施していただいているところである。

(委員)

先ほどから、KPIのことが議論されているが、どうしても目標を立てて施策を展開していくということが必要となるので、ある意味仕方のないことであると思うし、先ほど部長の発言にあつように、施設整備のようなものは、いかにその利用者を増やしていくことが指標になってくると思う。その中で、伊那市では、他の自治体と比べ、良い事業が展開されていると私は思っているが、生涯学習の分野のKPIの設定が、以降の文化・芸術、スポーツの分野と比べ、あまりにも消極的であると感じる。それぞれ1.5%程度の増加を目標としているが、文化・芸術、スポーツの分野ではより高い目標設定をしているので、何か理由があるのかもしれないが、もう少し積極的な目標とすることを検討されたい。

(教育次長)

目標値については、設定が難しい部分もあるが、指摘の趣旨をよく考えながら、再度検討させていただきたい。

(委員)

分野のすみわけという視点で質問と提案をさせていただく。P100の「3 図書館の充実」の最初のセンテンスのような「生涯学習」の観点と、同様にP104文化・芸術の「3 文化芸術施設の充実及び活用」の最初のセンテンスに創造館、歴史博物館、美術館について、ほぼ同じような内容の記載をあえて分けるかたちで記載しているが、私の意見としては、文化・芸術の分野になぜ総合図書館としての位置づけである「伊那図書館」が出てこないのかという意見である。伊那図書館が、文化・芸術分野における一番のシンクタンクになると思われるので、機能・方向性の面からも記述を加えたほうがよいと考えるがいかがか。

(教育次長)

「生涯学習」と「文化・芸術」の分野において、上手なすみわけができていないという趣旨の提案であると思う。指摘を踏まえ検討させていただく。

(委員)

先ほどの意見のとおり、伊那市は生涯学習が非常に盛んな地であると思っている。市民大学というものがあるが、卒業生が「大学院」ということで、自分たちでカリキュラムを作り活動している。非常に学習意欲が豊富で、シニアのライフスタイルの中に生涯学習というものが根付いていると感じる。私も63歳になるが、高遠高校に書道の良い先生がおり、もう一度入学したいと思っている。ただ、実際には63歳の人間が高校に入学することは難しいと思うが。社会人が小・中・高の中に生徒として入って、生涯学習ができるような仕組みができればよいと思ったところである。

(教育次長)

学校に入学してということは、なかなかハードルが高いかと思う。様々なところで、生涯学習の事業を展開しているの、そういったところで講座を受講していただくことは可能である。例えば、先ほどの高遠高校の書道の先生は、生涯学習センターで講座をお持ちであったと思うので、そういったことで、計画の中には反映させていただく。

(委員)

P101 の最後にある「人権同和教育」であるが、当然、非常に大事なことであると思うが、「人権教育」の分野の中で「同和教育」に取り組むという組み立てであれば理解するが、前から議論されている計画全体のバランスからするとどうなのか。市としてこの章で、このレベル感で取り組むという意図で書かれていけばよいが。人権教育の分野は、最近特に問題になっている性別(ジェンダー)のことが大きくなっているが、章立てとして、「人権教育」の分野のなかで、様々な差別に対しての取組を行うという構成のほうが、バランスがよいのではないかと感じたところである。

(企画部長)

人権を所管する立場で申し上げる。意見の趣旨はよく分かる。また、バランスも大事だということをも私審議会の中で申し上げてきている。今までも同和対策に取り組んでいるが、対象者が年々減ってきており、事業のスケール感からすると、掲載すべき箇所を検討が必要である。政策的にもセンシティブな問題であるが、これまでも取り組んできており、対象者が減ってきたからこれを記載しないというのは、非常に難しいのかなと思っている。この前の議会でも請願陳情があったが、LGBT が社会的な問題になっていて、セクシャルマイノリティに対する理解が進んでいないという社会問題について、原案では触れていないので、そういったことも含めて再度精査させていただきたい。

(委員)

センシティブなところを承知の上で意見を申し上げたところであるが、人権同和教育を行っているということは当然で、そこを除くということではなく、まとめ方によっては、逆に違和感を感じることになると思う。

(企画部長)

うまく伝わらなかったと思うが、私が申し上げたのは、今後やる・やらないという意味では、引き続きやりますということであり、内容としては削除できないという趣旨である。捉え方とすると、大きく人権という問題があり、その中で同和の問題もあり、LGBT の問題もあり、様々なあるので、そこを再構成させていただくという意味で申し上げたところであるので、ご理解いただきたい。

第5章－第2節－第2項 文化・芸術

(委員)

P103 で文化財の活用のところでお伺いする。文化財の保存・継承まではよいが、活用を申し出ても趣旨が違ふといって開示を拒まれた経験がある。このような活用ならよい、こういう活用はダメとか、線引きがあるのかどうか、その辺をお知らせいただければ、活用は大いに進むと思う。開示が難しいということで、ある事業がストップしている現状があるので、そのあたりの扱いをお

聞きしたい。

(教育次長)

文化財については、保存を主として行っているところであり、活用という部分まで進んでいないということが実態かと思っている。これについては、この計画に位置付けを行い、活用についても具体的に展開していくという意味で、ここに掲載させていただいているところである。

(委員)

「趣旨が違うからダメ」であっさり断られ、終わってしまい、それ以上話が進んでいない事例がある。きちんとしたルールがあれば、その範囲で活用は可能であると思う。担当者レベルでないといわれるとそれ以上進まないため、一考願いたい。

(委員)

私もまったく同じ経験をした。高遠には大変貴重な歴史的文化的文化財がたくさんあるが、簡単に見られる場合と、それではダメという場合が出てくる。基本的に管理し、保存している皆さんは、活用しようと思って管理をされていると思うが、そこにはルールがあるんだろうな、と感じたところである。現物に触れるのは、汚損等の心配もあるのでデジタル化をどんどん進めているところであると思うが、例えば、企業が商売で使いたいという場合、これは積極的に活用の対象としてよいのではないかと思う。また、地域のボランティアグループが、いわゆる NPO 的な使い方をする場合も、完全に使ってよい例であると思うが、何か趣旨が違うということで断られた経験もある。基本的には、文化財は単に保存して、そのまま誰にも触らせない、公開しないということではなく、活用して地域を活性化するという基本姿勢であるべきだと思うので、工夫をお願いしたい。

(委員)

去年こども新聞を作ったときに、土器が創造館にあるとたまたま聞いた。それまで知らなかったわけであるが、行ってみたら本当に素晴らしい展示品で驚いた経験がある。自分のまわりの歴史好きの人でも、創造館にそういった展示品があることはあまり知られていない。広報やチラシなど小学校でも配られているが、まだまだ発信する余地はあると感じたところである。遺跡好きや史跡好きの人を呼ぶ施設として、創造館は活用できると思う。活用だけに止まらず、発信や PR という部分も観光や誘客につながると思うので、積極的な取組をお願いし、そういう部分も記述を加えて良いのではないかと思う。

(教育次長)

情報発信にも努めているところであるが、より一層、そうしたことに取り組まなければならないと思っている。どちらかの項に表現を追記させていただく。

(委員)

P104 の「3 文化芸術施設の充実及び活用」の3番目のセンテンスで、「学芸員などの専門職員の配置を進める」とあるが、もう少しダイレクトに表現されたい。学芸員の専門性は当然であるので、「専任・専門職員」という記載はいかがか。スリム化を進める行政改革とは相反する記載になってしまうかもしれないが、これまでの委員からの意見を踏まえると、公開するためにはやはり学芸員を充実させ、きちんと調べて、それを公開できる状態にすることが必要ではないかと思う。私が知っているところでは、伊那谷の3市は専任の学芸員が少ないと感じているので、歴史・文

化を活用した都市づくりというためには、必要なことではないかと思う。

もう一点は、質問であるが、文化・芸術のセクションが、総務分野にシフトするという話があると聞いているが、それについてはいかがか。

(教育次長)

確かに学芸員をたくさん確保できれば、それだけの施策の展開を図れるというところではあるが、おっしゃられたとおり、行政改革等の関係もある。表現としては、「配置を進める」とさせていたでいるので、「専任」という部分については、検討させていただきたい。それと、職務権限の移管というか、特例の適用ということであるが、地方教育行政法の中で、スポーツ・文化について、条例で定めれば、市長部局に職務権限を移して執行することができる中で、現在、市長から提案を受け、教育委員会の中で検討しているところである。まだ、検討内容を話せるような段階にないが、そういうことを行っているということで、ご承知いただきたい。

第5章-第2節-第3項 スポーツ

(委員)

私は伊那市の体育協会のスキー部に所属している。最近感じることは、ここにも書いてあるが、スポーツをする子としない子の二極化が進んでいる。昔と違い子どもたちが外で遊ばなくなったため、非常に体力差を感じる。第2次計画の展開方針として、一つは生涯スポーツの普及、もう一つは競技者を育てるという2本柱になっていると思うが、これには指導者の確保・育成が必要である。P106 の「2 スポーツに係る人材育成」の2つ目のセンテンスに「多様なニーズに対応できる指導者の確保・育成」とあり、文章としてはこういうことだと思うが、これを具体的に進めていく必要がある。例えば、スポーツ指導者を育成するための講習会を開催するとか。現在も、スポーツ振興課で現役指導者のための講習会を年に数回行っているが、これから指導者になりたいという人も中にはいる。他県等では、指導者の掘り起こしのため、そういった希望者に補助金を出している例もある。指導者を希望する者は、ある程度の出費はする覚悟はできているので、そこに若干でも補助なり、支援をしていただければ、指導者を確保することができると思うので、ぜひそういった具体策を表記していただくほうが良いと思うので、検討されたい。

(教育次長)

大変重要な指摘をいただいたと思っている。具体的な内容・表現について、この計画に載せることが適当かどうかも含め、指導者の支援について検討させていただく。

(委員)

P106 の「4 スポーツ施設の有効活用」で、よく聞くのは、調整会議でも予定がいっぱいで、体育施設が使えないという意見のほうが多い気がする。KPI では稼働率を増やすことになっており、相反する内容のようにも感じるが、ここに書かれている「効率的な利活用」というのは、閑散している施設へ誘導することを想定しているのか、新たな整備・統合などによって稼働を増やすという意味なのか。少しはつきりしないと感ずるところであるので伺いたい。

(教育次長)

例えば、学校施設の開放については、利用の時間帯は当然学校が終わってからということに

なるため、各団体の皆さんに協力いただきながら、調整して使っていただいている。指摘のように、あまり使われない施設もあるため、それも含めた効率的な利活用という意味での表現であるが、指摘をふまえ、もう一度検討させていただく。

(3) 前期基本計画第6章について（説明）

《資料No.7－③について事務局から説明（次回協議）》

4 その他

なし

以上